1991.3.8

CYRニュース No.26

幼い難民に未来を

発行：幼い難民を考える会　〒160 東京都新宿区南元町6－2　TEL.03-3353-9947　FAX.03-3353-9739

社会的に認められていない保育施設

―カンボジア調査報告

1990年9月27日から10月7日まで、幼い難民を考える会は、カンボジアの幼児施設の様子を見てきました。目的は、カンボジア国内での活動の可能性を検討し、タイの難民キャンプでのプログラムを、よりカンボジアの状況に合った内容にするためです。公営の保育施設、栄養センター、母子保健センターなどを見学、カンボジアの政府関係者との話し合いの機会ももちました。

☆カンボジアの一般的状況

カンボジアの人口は約800万人。成人の64パーセントが女性で、すべての世帯の45パーセントが女性の世帯主になっています。人口の約90パーセントは農業従事者です。

首都プノンペンの人口は約80万人。その内30パーセントは中華系。公務員の月給は低く、3、4日で使ってしまう程度（5000～8000リエル　1円＝約5リエル／90年9月末現在）なので、副業をもつのが普通のようです。

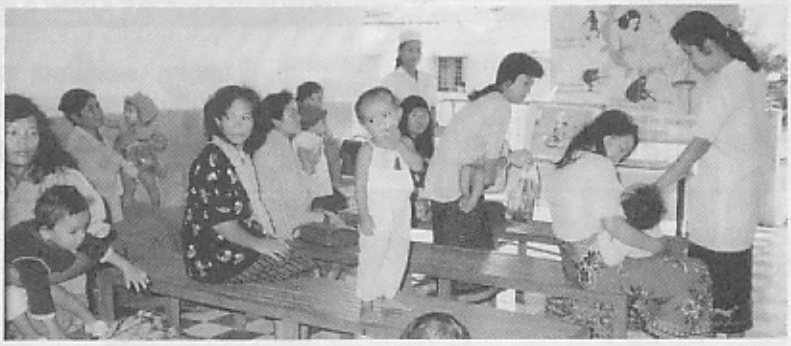
通貨の交換比率の変動は激しく、物価も著しく高騰しています。しかし、市場には海外からの物資と、闇の物資が豊富にあり、活気に満ちています。夜9時から朝5時までは夜間外出禁止令が敷かれているため、夜の通りは非常に暗くなります。

5歳未満の子どもの死亡率は1000人中 199人（日本は8人）と世界で16番目に多く、1歳未満の死亡率は 127人（日本は5人）と、子どもをとりまく状況はあまりよくありません。

☆教育の状況

カンボジアでは、1975年から79年の間にほとんど完全に教育制度が破壊されました。79年から、政府はユニセフの支援を受けて教育制度の再建に努力しています。義務教育は、小学校の5年間。続いて中学校3年間、高校3年間があり、ごく少数が専門学校（医療、商業、芸術、農業、技術等）や大学に入ることができます。未就学児のためには、3歳以下の乳幼児の施設と3歳から6歳の年長児用の施設の2種類があります。

小学校の就学率は30～90パーセントと、地域によって格差がかなりあります。地方では、親の手伝いや、弟、妹の面倒をみるため学校をやめる子どもが多く、その結果就学率は低くなり、町に出てストリートチルドレンになる子どもも多くいます。



カンダール州の母子保健センター。予防接種や母親教室などが行なわれている。

☆カンボジアの保育施設

公営の保育施設は、前述のように子どもの年齢により、3歳までの乳幼児施設（保健省管轄）と、3歳から6歳までの年長児施設（教育省管轄）に分けられ、女性が働く工場や政府機関等に併設されています。政府は保育施設に対して、保育者の給与、建物の維持費、食費等の援助を原則として行なっています。保育者の給与は 3,000～5,000 リエルと、公務員よりさらに安いようです。親は施設に月 250リエル払っています。

しかし政府が財政難のため、2年前プノンペン市内に60か所あった乳幼児施設は、90年10月現在、40か所に減らされ、保育施設の関係者は、自分たちで経営するよう求められています。このため、幼い子どものいる女性を、十分な労働力にならないという理由でやめさせる工場経営者もいるようです。年長児の保育施設は、カンボジア国内に 424。工場や病院には、乳幼児施設か年長児施設のどちらかが設置されているだけで、この両方を備えている工場等はごくわずかです。見学した3つの保育施設のうちでも、乳幼児・年長児施設の両方取り入れていたのは生産実績のよいタバコ工場だけでした。

大きな問題としてあるのは、乳幼児と年長児の施設の政府の管轄が違うため、協力関係が成り立たない点です。フランスの民間団体アンファンドゥカンボージュは、この問題を解決するための話し合いを政府と始めようとしていました。

☆保育者トレーニング

乳児施設の保育者：保健省の母子保健局ではプノンペン市内約50か所で6か月間の養成を行なっています。しかしここで養成を受けるのは、工場や政府機関が選んだ人であって、本人の希望ではないことが問題の1つになっています。工場主の多く

は、ただ子どもを預かっておけばよいと考えているので、仕事のできない人を保育者にしようと考えがちです。保育者になった人は、工場で働く場合より低い手当てになるため、いやだと思っている人がほとんどです。

年長児施設の保育者：87年から、プノンペン市内2か所に教育省就学前教育局管轄のトレーニングセンターがあります。8年の学歴をもつ16～20歳で、各州の試験に合格した人を対象に1年間の養成を行なっています。政府から奨学金が支給され、衣食住も無料という好条件ですが、見学した保育者トレーニングセンターは10月新学期にもかかわらず、10月3日になっても政府の財政難が原因で、食糧も届かず、生徒は各州から集まってきているのに開校できず、関係者は顔を曇らせていました。

☆栄養センター

保健省の88年の調査によれば、5歳以下の子どもの16%が栄養失調（体重が標準の80%以下）

で、3%が重度の栄養障害です。慢性的な栄養不良のため、発達に遅れがある子どもは、プノンペンで22%、ほかの地域で32%いるそうです。

CYRが訪ねたプノンペンの栄養センターは、0～8歳の孤児施設で、栄養不良の乳児、栄養不良の身体障害児・知恵遅れの子どもが収容されていました。保育者には、政府のトレーニングを終えた人が派遣されてくるそうですが、なかには保育に関心がなかったり、意欲が感じられない人がいるのが一番の問題だと聞きました。

☆ユニセフの女性プログラム

ユニセフはKWA（カンボジア女性協会）と協力して、3つの村で絹織物、菜園づくり、砂糖やしの栽培と砂糖採取、縫製などの女性の収入向上プログラムを行なっています。KWAとは、国の政策を伝え、女性の理解と支持を得るために政府が組織した機関で、中央から末端の村まで、18歳以上の女性180万人の会員をもっています。何かを始めようにも元手がない女性のために、少額貸付金制度ももっているこの協会は、女性が働いている工場や機関に対して保育施設を開くように働きかけています。しかし、保育施設がなぜ必要なのかということが、ま

だカンボジアでは親にも、社会にも認められず、また財政難のため、施設の運営はなかなかうまくいかないようです。

男性と老人の多くを失ったカンボジアの家庭では、母親が働く間、保育施設にあずけられなければ、幼児は放っておかれるか、年端もいかない兄弟の世話に任されるしかありません。ユニセフの調査によれば、0～4歳児170万人（89年）のうち就学前教育を受けている子どもは、わずか3.75%にすぎません。

☆カンボジアでの活動の可能性

1）カンボジアで、すでに幼児や女性のための活動をしている団体（KWA、ユニセフ等）との共同プロジェクトを組む。

2）カンボジア政府の教員養成プロジェクトへの協力

の2つが考えられます。対象を難民に限定せず、活動の枠を広げられるようさらに検討をすすめたいと思いますが、みなさんはどうお考えでしょうか？　ご意見お待ちしています。

2回目の調査は、2月27日から1週間の予定です。

希望の家レポート

●母親教室再開

87年から休んでいた母親教室を再開するため、10月から女性保育者の中から2人を選び、指導者としてのトレーニングを毎日1時間ずつ続けました。2人とも1歳にならない子どもを抱えていますが、はりきって応急処置の仕方、栄養のことなどを勉強。約1か月のトレーニングの後、ほかの保育者の前で講義をしてもらいました。12月から母親を集め、今年の1月には45人の生徒が集まりました。45人の中には、男性も、未婚の人もいるので厳密には母親教室とはいえないのですが、3組に分かれて、週1～2回、30分～1時間ずつ教室を開いています。

一方的に教えるのではなく、伝統的なやり方をカンボジアの人から聞いたり、体験談を語ってもらったり、質問に答えたりと活発な教室になっています。この教室で学ぶ応急手当ての方法を布絵にして、本国帰還のときに渡すことも考えています。

●小学生の活動

参加している小学生の数は少ないながらも、週案にそって野菜や花を植える活動、折り紙、絵描き、栄養ゲーム、スポーツ、竹ひご編み、女の子を対象にした縫い物、などを行なっています。

折り紙は、子どもが大好きなもので、手先を器用にするためによい教材です。とくに2、3人の子どもは、ツル、アヒル、船、花など5、6種類のものを折ることができ、小さい子どもたちにも教えています。

子どもたちが多く、あまり日差しが強くないときは、外でフットボールやバレーボールをします。まだ子どもたちは、ボールのつかみ方がよくわからないようなので、丸く輪になって、1人ずつボールを受け取る練習から始めています。

●絹糸とりのため桑の木植え

9月にCYRが行なったカンボジア国内の調査の結果、絹織物が女性の収入向上に役立つこと、養蚕技術がまだ発達していないため、絹糸を中国、ベトナム、タイ、マレーシアなどから輸入していることがわかりました。

この結果を受け、11月から桑の苗5,000本を保育センター内と、近くの井戸のある空き地に植え、木工室のワーカーがフェンスをつくり、水やりは、木工と織物のワーカーが交代で毎日夕方1時間ずつ続けています。桑の木は今のところ順調に育っています。最終的には、桑の育て方から、絹糸の取り方までをカンボジア語のマニュアルにする予定です。

かおいだん かわら版

開放キャンプに変身？

カオイダンキャンプもつくられてから十一年。閉鎖キャンプの原則は変わりませんが、実際には随分開放的になってきました。そんな話題を三つ紹介します。

カオイダンキャンプには、大きな市場が二つありましたが、衛生上問題があるということで昨年十月に取り壊し、新しい場所に建て直しました。タイ軍には公認されていないため、闇市にはちがいありませんが広く、きれいになり、品物もとても豊富です。

今年に入って急に増えているのがビデオ屋。店にビデオデッキを置いて、客に五～十バーツでカンボジア語のビデオを見せています。一バーツ硬貨をにぎりしめては入りびたっている子どもがいて、保育園の出席率に影響が出始めています。

またキャンプの出入りも、以前のようにタイ軍が絶えず監視の目を光らせているという状況ではなくなったため、カンボジア国内に「遊びにいく」人が出てきました。もちろん、「こっそり」キャンプを出るわけですが、親族に会ったり、住んでいた村の様子を見て、またキャンプに戻ってくるのです。

キャンプにもっとも近い国境の町、アランヤプラテートの近くでは、カンボジアからの品物（魚の干物、絹のサロン、プリントのコットン、籐のかごや家具等）やベトナム製か中国製の茶器や漆の小箱、チェコスロバキア製のフェルトの帽子、シンガポールのタバコなどを売る市も増えています。このことを考え合わせると、アランヤプラテートからカンボジア国内への交通路は、かなり開けてきているようです。

住民の帰還への反応

昨年の九月、カンボジア国内の調査に行った折に写した写真や、買ってきた本をカンボジアのワーカーに見せると、ほとんどの人は喜んでくれました。とくに十年近くキャンプにいる人は、国を懐かしがっていましたが、その反対に、比較的新しく入ってきた人の中に、「絶対帰る気はない」と言い張っている人が目立ちました。帰ったあと、いじめられたり、殺されたりする心配や、また内戦が始まるのでは、という不安を抱いている人がほとんどでした。

また、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）は一月八日、初めて公式に、帰還についてのカンボジア語の手紙を住民に配りました。キャンプで働く民間団体にはずいぶん以前から帰還の話は伝わり、各プログラムもそれに備えた形になってきましたので、「ようやく」の感があります。

手紙の内容は、いずれ政治的な解決がついたら帰還が始まる。その時は、UNHCRが安全な交通手段を提供するので、事故を防ぐため自分たちで勝手に移動をしないようにというもの。国境地帯は地雷が多く、まだまだ危険です。

親の期待と政策の狭間にいる子どもたち

湯山　佳代

在タイスタッフの湯山佳代は、90年3月から8月まで、タイのパナニコムキャンプにあるマイナースセンターで研修を行ないました。

マイナースセンターは、親の保護が受けられないベトナム人の未成年者（9～18歳）を収容している施設です。パナニコムは、カオイダンと比較して緑も少なく、狭い敷地内に、外国への定住の可能性があるカンボジア・ラオス・ベトナム人、難民かどうかの審査を待つベトナム人、審査の結果自国に帰らなければいけないベトナム人、とインドシナ3国の難民たちがひしめき合っています。1989年3月10日以降タイに入国したベトナム人には、難民資格審査（スクリーニング）が課されているのです。現在、約15.000人のキャンプ人口の70パーセント近くを占めるベトナム人の半数がスクリーニング待ちか、結果が出て本国帰還しなければならない人々です。子どもの場合、通常のスクリーニングを通さず、一人一人の子どもに最も適う処遇が決められることになっています。定住資格を持つ子どもでも、親族等の希望があれば本国に帰還することもあります。マイナースセンターにいた150人程度の子どもたちも、約半数が定住資格を持っていません。このセンターで初めての帰還が行なわれたとき、偶然その場に私が居合わせることになりました。いずれは帰還するはずの子どもたちですが、定住資格を持っている子どもが1人含まれていたため、センター内は騒然となりました。その混乱した状況でも比較的落ち着いた態度を示していた男子に対し、いつもは平静を装っている女子が口をとがらせ、顔を紅潮させて激昂しました。彼女たちのリーダー的存在だったチャウが、今回の帰還組に入っていたことも動揺を一層大きくしたようでした。「お願いだからチャウを逃がしてあげて。」と途方もない要求をしてくる始末です。チャウの場合は、一人っ子で、幼い時に父親を失くし、母親が彼女をベトナムに呼び戻したいといってきている特別なケースだといくら説明しても、国に連れ戻すことを親が同意する訳がないと言い張って譲りません。親の保護が受けられないといっても、子どもたちに親がいないのではなく、私が会った子どもの99パーセントがベトナムに肉親を持っています。数多い兄弟姉妹の中から一人、あるいは数人が選ばれ、その肉親によって国から送り出されて来ているのです。極貧とはいえないまでも貧しい家庭が、十分な教育と自由を第三国に求めて大枚を叩いて送り出してくるのです。定住することが唯一の生きる道と言い聞かされてきた子どもたちが、同じ親から掌を返すように国に帰れと命じられても、そうやすやすと受け入れられるはずはありません。

しばらくすると、チャウが目を真っ赤に膨らませて戻ってきました。おそらく「チクショウ！」と言っているのでしょう、床に本を叩きつけながら何度も泣き叫んでいました。それを見て、ほかの子どもたちも同様に目を潤ませてい

ます。チャウは涙が溜れると、避けられない現実を悟ったらしく、一人一人に別れの挨拶をし始めました。しかし、車に乗り込む段になると、再び身体が反射的に拒否反応を起こし、結局は外国人スタッフが力で車に押し込むことになってしまいました。チャウの涙はセンター全体に飛火し、彼女が去ったあとも、その日は1日中子どもたちのすすり泣く声に包まれていました。子どもたちの感情は、怒りから次第に悲しみに変わり、さらに「次の犠牲者は自分かもしれない」という不安にとって変わっていきました。

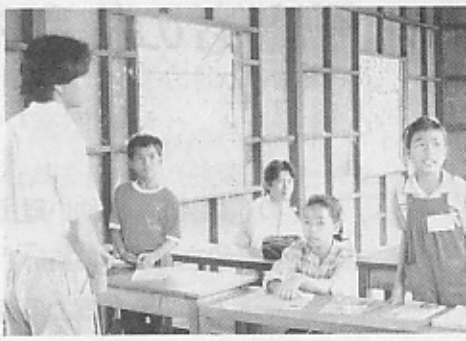
この事件は、子どもたちばかりでなく、私たち外国人スタッフの片腕となって働いてくれたベトナム人スーパーバイザーの不信感をも募らせる結果となり、後味の悪さだけが残ってしまいました。皮肉にも、事前に知らされていたのは外国人だけだったのです。

翌日、重い足をひきずってマイナースセンターに行くと、定住資格を持ちながらも帰還者リストに名前が載っている子どもがいるという噂が流れ、パニック状態になっていました。彼女らは、すすり泣きながら、つたない英語で「帰りたくない」と訴えてきます。私は彼女たちが本当に助けを必要としているとき、心の安らぎにさえなれない存在だということが情けなく、その場から逃げたい気持ちで一杯でした。あの後、彼女たちがどういう状態になっているのか、自分の将来に対してどれだけ不安に思っているのか、想像さえできなかったのです。毎日、毎日彼女たちと一緒に過ごした時間はいったい何だったのか……。

翌日、これは誤報であることがわかりました。「昨日はごめんなさい」と当人はケロリとしていましたが、彼女たちの取り乱した姿は私の脳裏に焼きついたままです。

その後間もなく、定住資格のある子どもたちは全員マイナースセンターから移され、定住に備えて自立を尊重したグループ単位の生活に入りました。一方、帰還する子どもたちはシキウという一時滞在キャンプに移されるまでマイナースセンターに残ることになったのです。今まで、子どもたちに英語を教えたり、課外活動に関わってきた私たち外国人も、分割を機にセンターへの出入りを禁止されました。

子どもたちは第三国定住がユー



トピアでないことを百も承知しているようです。しかし、一歩ベトナムを離れた以上帰るべき祖国はない、第三国しか生きる道はないと、多くの子どもが親に言い聞かされているのです。子どもたちの一番の問題は、帰還そのものにあるのではなく、何ひとつ自分の意志では決定できない状況に置かれていることにあります。彼らの行動の多くは、親や大人の意志の反映にすぎません。子どもの人権という側面を重視するなら、もっと事前に情報を与え、帰還してから迫害の恐れがないことと、本国の肉親と連絡をとらせ、子どもが十分に納得した上で帰還をすすめるべきだったと思います。いずれにしても、親の意志によって決定されたことを拒否する権利は実質的に子どもにはありません。だからと言って、これを非難する権利もまた誰にもないのです。戦後15年を経たベトナムの傷の深さを肌身で感じさせられた今回の研修でした。すべてが悪循環のなかで、子どもに一番のしわよせがきていることだけは間違いないようです。

子どもの権利を守るとは

—— 子どもの権利条約はなぜ必要か

講師　吉峯啓晴氏

昨年の6月24日、「幼い難民を考える会設立10周年の集い」の記念講演として、弁護士の吉峯啓晴氏に子どもの権利条約の概論をお願いしました。以下はその要旨です。

子どもの権利条約は、1924年の国際連盟「子どもの権利宣言（ジュネーブ宣言）」、59年の国際連合「子どもの権利宣言」を踏まえ、内容をより包括的、具体的にしたものです。現代における子どもの権利の意味をはっきりさせると同時に、条約という形で拘束力をもたせたわけです。人が生まれながらに持っているのが基本的人権ですが、現実には多数者の人権が念頭に置かれていました。それが第2次大戦後、少しずつ少数者の人権に目がいくようになり、女性、障害者、そして子どもに目が向いてきたといえるでしょう。

しかし、第三世界では今でも1年間に1,300万人以上の乳幼児が亡くなっています。このうちの4分の1は、きちんとした医療が受けられれば助かる子どもだと言われています。これは最も根本的で初歩的な生命に対する権利さえも守られていないということで、ましてほかの権利はむずかしい状況にあるわけです。こういう状況から考えると、子どもの基本的人権について、国際的にも責任ある対応をする必要があり、このことが、「条約」にした背景にあります。

子どもの権利条約は、前文から第3部までの、全部で54条からなっています。前文には条約の背景、趣旨、原則が、第1部には個別の権利の説明、第2部は条約が実効性をもつための方法、第3部には手続き的なものが盛り込まれています。“子どもの権利条約”を、“子どもの権利宣言”と比較し、特徴をあげてみましょう。

①内容が詳細で具体的　②子どもの市民的権利について詳しく規定している　③子どもを保護の客体としてだけではなく、権利の主体としてとらえている　④国家の義務を定めている　⑤国際協力の必要性を前提としている　⑥第3世界のニーズを配慮している　⑦難民、障害者、少数民族、先住者の人権を配慮しているなどです。

この子どもの権利条約は、20か国が批准すれば発効することになっています。（90年9月に発効／編集部注）　多分、日本もみなさんの運動があれば批准するでしょう。批准されれば、国内法も体系的に整備せざるを得ない訳で、子どもにかかわる活動をしている団体にとっては、法的な基礎が整備されることにもなります。幼い難民を考える会の活動は、子どもの権利条約が目指しているものを実現させるためにきわめて重要なものだと思います。会のますますの発展を祈っています。

10周年の集い
にぎやかに なごやかに

記念講演に続いて、カンボジア料理を囲んでの懇親会がありました。母国語での相談を担当しているミム・ソワンさんを中心にたくさんのカンボジアの人たちが朝までかかってつくってくれた料理。初めて食べる人もおいしさと、食べやすさに感激したようでした。

幼い難民を考える会を支えてくださっている方々を代表して5人の来賓の方よりお祝いの言葉をいただき、久しぶりの再会にあちこちで話に花が咲いて、なごやかな雰囲気でした。

食後は、「インドシナの歌と踊りを楽しみましょう！」。カンボジアの子どもたちのかわいい踊りに始まり、カンボジアの伝統楽器キム（弦楽器）とスコー（打楽器）の演奏、ベトナムの人たちの歌と踊り、ラオスの古典舞踊と続き、最後は参加者も加わって踊りの輪ができました。カンボジアやラオスの人のしなやかな手つきはとうてい真似できませんでしたが、にぎやかに楽しむうちに10周年の集いは無事終了。

参加者は日本人、インドシナの人たち合わせて約 150人でした。

全国各地でパネル展開かれる

CYR10周年を記念してのパネル展「子どもは今を生きている」が、昨年8月18日から、東京・渋谷にある東邦生命ギャラリーを皮切りに全国各地で行なわれました。

このパネル展は、「幼い難民を考える会10年の歩み」「子どもの表情がこんなに変わった」「幼い難民を考える会国内での活動」「鉄条網の中の子どもたち」の4つのブロックから構成されています。10年間の活動の歴史を振り返りながら、活動の意味、現在の活動状況を報告するのが目的です。会員、関係者のご協力により、次の場所でパネル展を開くことができました。

★8月18日～24日
東京・渋谷の東邦生命ビルギャラリー

★9月15日～20日
熊本市・熊本上通り郵便局内コミュニティスタジオ
会員の世良喜久子さんがメンバーになっている「虹の会」が、パネル展示と共にキャンプ製品を販売。

★10月1日～9日
京都市・京都YMCAロビー
14日（日） にも、京都内に新しくできるYMCAのオープニングに展示。
協力／京都YMCA

★10月21日
兵庫県・西宮YMCA

★10月28日
岡山NGOフェアパネル展
にCYR岡山支部が出展。

★11月14日～19日
兵庫県・尼崎市西武百貨店つかしん店ゴールドサロン
東京の会員・榎並瑛子さんの奔走と関西方面の会員のご協力により実現しました。

パネル・作品展

「南風を運んできた人たち」

日本に住むインドシナの人たちの素顔

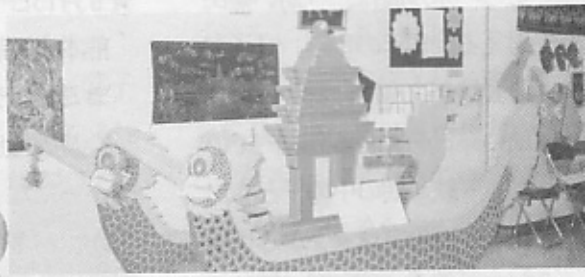
日時　十二月十三日(水)～十二月二十五日(火)
会場　NHK展示プラザNHKぎゃらりー
主催　NHKサービスセンター
　　幼い難民を考える会

長さ5メートル、高さ2メートル、幅3メートルもある巨大なラオスの舟。9月に行なわれる舟の競争の祭りに使われる「飾り舟」。ラオスの人たちが、大和定住センターに在所中に作ったもの。しかしこの舟を作った人たちは、その祭りを経験したことがない。

CYRでは、東京・渋谷にあるNHK展示プラザ・ぎゃらりぃにて、12月13日～25日、「南風を運んできた人々」と題したパネル・作品展を開きました。これはインドシナの人たちの作品、民芸品、写真を通して、文化や伝統、日本での生活ぶりを一般の人たちに知ってもらうために企画したものです。この「ぎゃらりぃ」はNHKのスタジオ見学コースに含まれているため、毎日数百人もの人たちが訪れました。その中でじっくり見てくれたのは何割かですが、不特定多数の人たちにインドシナのことに触れてもらう機会を提供できた意義は大きいと思います。

会場では、幼い難民を考える会10年の歩みと国内活動を紹介するパネル展示、キャンプの製品販売も合わせて行ないました。

タイトルのパネルのバックは、ラオスのパッチワーク。



こちらはカンボジアの「飾り舟」。カンボジアにも舟の競争の祭りがあり、その夜灯籠流しが行なわれる。各家庭では、竹やバナナの葉を使って小さい舟をつくり、食べ物や花を乗せて川に流す。

ベトナムとカンボジアの子どもたちの絵を熱心に見る見学者。（撮影／前田春人）

ラオスの民芸品と民俗衣装、織物。（撮影／前田春人）

カンボジアの伝統楽器「キム」を演奏するチャン・ブーンさん。

日曜と祭日の２日はカンボジアの踊りも登場。踊っているのはイム・キムスールさん（右）。

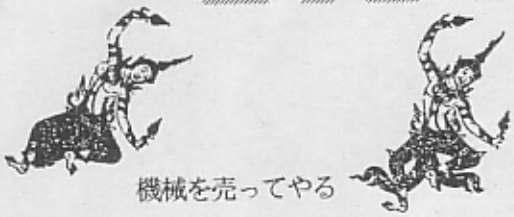
予想以上によく売れた、キャンプの絹織物や製品。

支部だより 岡山

アプサラ

支部の会報から

タイの歌を紹介します



「アリガト」

歌／タマダーバンド

アリガト、アリガト、アリガト
アリガト、ドウモ
遠く日出ずる国から
サムライがタイへやって来た
友好的なタイ人に大感激
カネを持ち込み
投資やら出資やらのニッポン人
ショッピングセンターは
どこへ建てよう
空をつく高いビル
ショッピングプラザ、
スーパーマーケット
タイは狙うにいい所
鉱物、天然ガス、ゴムもある
安く買って加工して高く売ろう
工場建てて、街をつくる
機械やら何やらを持ち込んだ
最新技術に水力ダム、エレク
トリック、オートマチック、
コンピューター
ワタシが援助してあげる
アナタの開発助けてやる
電気をつけてやる
ワタシが商売して、
機械を売ってやる
道路をつくってやる
ワタシが自動車を売ってやる
ニッポンさまさまだ
ニッポンよ「アリガト」
アリガト、アリガト、アリガト、
アリガト、ドウモ
タイの労働者は使いやすい
余計な交渉もなければ要求もない
よそものが上司顔
タイの村人は労働者
ワタシには商売を支配する
権力がある
学生どもよ、反日はいかん
知らんぷりして勉強に励め
オオサカやフジヤマ* で
日本のことでも学べ
「アリガト」
頭をペコペコ感謝する
タイは赤字で、利益はニッポンへ
タイは貧しいが心は豊かだ
カネじゃなく、心でもって
人と付き合う

詩・曲 ／Sang Isra
日本語訳 ／石丸尚志

＊オオサカ、フジヤマはソープランドの店の名前とか。

この歌を教えてくれたのは岡山の会員小川輝樹さんです。

☆タイ語講座始まりました

サワディー カ！（こんにちは！）

岡山大学に留学中のタイのウィーラークンさんを講師に迎え、タイ語の講座が昨年12月から始まっています。ウィーラークンさんはタイでは本物の先生です。マイ カオチャイ カ！（わかりません！）を連発しながら、楽しくやっています。日時は不定期です。興味のある方は、どうぞ下記までご連絡ください。

☎086934－4602 山林規子

☆毎週月曜日に岡山YMCA203号室に集まっています。

時間は18:30 ～20:30

宛名書き、会報の編集、学習会の打合せなどをワイワイ言いながらやっています。どうぞあなたもご参加ください。

岡山YMCA：岡山市中山下1-5-25

岡山支部＝〒701-11 岡山市津高207-10 成澤貴子方

☎ 0862-55-1716

大阪 支部だより

ネットワークづくりのための合宿を主催しました。

昨年9月29～30日、兵庫県にある神戸学生青年センターで、幼い難民を考える会大阪支部主催による「定住者について考える」合宿を行ないました。会員をはじめ、関西で定住者にかかわっている人にも参加してもらいネットワークづくりをめざしたものです。東京事務局からも山崎尚枝が参加しました。

第1日目には、鷹取カトリック教会（兵庫県神戸市）で、ベトナムの子どもたちに勉強を教えているシスター石戸に活動の様子を伺いました。「鷹取土曜学校」と呼んでいるこの子どもたちの勉強の教室は、1987年に始まりました。現在ボランティアの教師約30人、ベトナムの子どもたちは小学生、中学生合わせて36人。土曜学校を開いた理由は、ベトナムの子どもたちに高校受験の失敗、中学校や小学校での学習の遅れが目についたからだそうです。

土曜日の午後2時から4時まで開いている土曜学校は、学年毎にボランティアの先生を3、4人、担任と決めているのが特徴。これは、必ずしも毎週ボランティアの先生が来られる訳ではないので、休んだときでも、ほかの担任がカバーでき、子どもとの間に信頼関係をつくるための工夫です。学年毎に子どもの記録帳をつけ、ほかの先生に伝えることもしています。

シスター石戸は「子どもたちには、いろいろな経験を通して共に生きていくことの大切さを学んでほしい」と結びました。

次に1日目、2日目のフリーディスカッションで出た意見をいくつか紹介しましょう。

「中学1年生を教えているが集中力がない。暴れ出すと、力で抑えることが多い」。「教える立場ではなく、自分がこの子の親だったらと考えて子どもの手を叩くことはある。しかし、ベトナム人は言語障害者とは違う。彼らは、ベトナム語なら十分意見が述べられる。ベトナム人、日本人双方の歩み寄りが大切」。

「神奈川県では、日本に永く住んでいるインドシナの人を教師として学校に招き、同国の子どもたちに教えてもらっている」。

「アメリカでは、日本に比べ、能力さえあれば、奨学金をもらって大学に行ったり、良い職業につくチャンスは多い。その一方、ベトナム人だけの町もあり、英語を使わない生活を送っている人もいる」。「ボランティア以外の人にも、インドシナの人や文化のことなど情報を伝えていく必要がある」etc.

今回の合宿は、ネットワークづくりの目的もまずまず果たせたと思います。この成果を、今後の「竹の子レポート」に生かしていきたいものです。

報告／中野能行

△支部をつくりませんか

CYRでは、パネル展、報告会、交流会、キャンプ製品の販売などを地域で行なってくださる方を求めています。詳細は事務局までお問い合わせください。

◆◆◆◆ なぜか講演依頼の多い1990年でした ◆◆◆◆

昨年4月に山崎尚枝が事務局に入ると、あたかもそれを待っていたかのように講演依頼が殺到しました。

5月24日　青森県弘前市・弘前聖愛高等学校のキリスト教教育週間に参加。テーマは正義 —— 共に生きる。幼い難民を考える会の活動を紹介。

5月26日　円福友の会主催のホームステイ事前研修に講師として招かれる。長野のホストファミリーに、なぜインドシナの人たちが日本に来たのか、在日インドシナの人たちの現状などを報告。お互いの文化や習慣を尊重し、知ろうとすることから交流は始まるのでは……。

6月21日　麗沢大学学生グループ難民問題研究会主催の勉強会に講師として招かれる。同グループのベトナム人学生ヤン・タイ・チョワンピンさんの「僕たちのほしいのはお金ではありません。みなさんの心がほしいのです。」という言葉が印象的でした。

7月8日　幼い難民を考える会岡山支部主催による「CYRの国内活動報告会」。アジアの民芸品のお店コットンコトムにて。CYRのキャンプの製品も販売。岡山で様々な市民活動をしている人たちが参加してくれました。岡山支部の成澤さんのパワーの源はこの素晴らしき仲間たちにあるようです。

8月8日　曹洞宗ボランティア会（SVA）東京事務所新人スタッフ研修で、在日インドシナの人たちの現状とCYRの国内活動を紹介。熱意あふれるSVAのスタッフのみなさんにいろいろと教えられ、また励まされました！！

10月4日　国立婦人会館主催による国際交流フォーラム、「異文化共存の社会づくり」に参加。難民援助から学ぶ共存をテーマに話しました。今"難民"はよその国の人々、よその国のできごとではありません。私たちと共に暮らすインドシナの人たちのことをもっとよく知り、同時に私たち日本人のこともっとよく知ってもらいましょう。女性パワーに改めて感心させられるとともに、男性ももっと積極的に参加してほしいと思いました。

10月6日　毎日新聞国際交流賞受賞式で、CYRの活動をビデオを使って紹介。

円福友の会にて。

11月10日　山手YMCA他主「子どもの権利条約」第3回に発題者の一人として「難民の子ども」をテーマに、カオイダンキャンプの子どもたちの様子、10年前と最近の子どもたちの変化、会の活動を報告。人間形成にとって大事な幼児期に難民になった子どもたちは多くの試練を受けなければなりません。しかし、幼い難民は自分自身でその試練を乗り越えることはできないので、大人たちの責任が大きいのです。

以上8か所での講演、学習会には、事務局の山崎が出席。

11月11日　アジア医師連絡協議会主催によるシンポジウム「在日外国人の医療問題を考える」に相談窓口の団体の1つとして参加。最大の問題点は言葉。次に医療費と情報不足があげられました。元難民の場合、それにさらに精神的な問題が加わることを、事務局の石井じゅんが報告しました。

体験しました ホームステイ

昨年7月31日から8月3日まで、長野県の円福友の会主催、幼い難民を考える会共催のアジア児童親善ホームステイが行なわれました。東京近県に住む、ラオス、カンボジア、ベトナム人の小学生から高校生まで28名が参加。そして長野市および近郊の24家族が、小さな友人たちを迎えてくれました。日頃、都会で生活する子どもたちが、信州の自然に親しみながら、日本の家庭生活を経験し、日常生活の中で自然な交流ができたら……と願っての企画です。

7月31日12:42　長野篠ノ井駅到着。円福友の会の藤本御住職や関係者の方々が笑顔で出迎えてくださいました。早速ホストファミリーの待つ会場へ向かいます。乗り込んだバスが円福寺幼稚園のかわいらしいバスだったので、ビシッとカッコよく決めた中学生男子たちは、「恥ずかしいぜ」としきりに照れていました。

「私が泊まるお家の人ってどんな人？」 —— 少し窮屈そうにシートに座る子どもたちの顔がだんだんと緊張してくるのがわかります。子どもたちを迎えたホストファミリーの方たちも、少々緊張気味の様子です。大人も子どももそれぞれの、ワクワクとドキドキを一杯抱えながらホームステイは始まりました。

それぞれの家庭で2泊した後の8月2日、長野市から車で1時間、戸隠高原のペンション・めるへんひゅってに全員が集合し、合宿が行なわれました。

「わぁー元気だった！？」「2日間何してたの？」

友だちの姿を見つけるたびに子どもの顔が輝きます。知り合って短い間でも、しっかり仲間

意識が育っているようです。子どもたちは少しもじっとしていません。早速、庭ではバレーボール、バトミントンなどのゲームが始まりました。チームは、国、性別、年齢が入りまじった文字通りの混成チーム。共通のコミュニケーションの手段は日本語。日頃知り合う機会の少ない他のインドシナの国の子どもとも親しく遊ぶ機会になりました。彼らを見ていると、誰がなに人なのかわかりません。回りの大人たちも、そのことを意識することはなかったのではないでしょうか。昨今、日本で暮らしているインドシナの子どもたちが、どんどん日本人と同化してしまい、母国の文化や習慣から遠のいてきていることを、よく耳にします。また、異文化を受入れ、共存していくことが苦手な日本人社会も問題になっています。しかし、彼らを見ていると、国も民族も文化も越えた「人間」としての部分でつながっているように思えました。

翌8月3日、お昼過ぎに長野を出発した電車の中は、思いのほか静かです。前の晩、大いに盛り上がって夜明しをした子どもたちはスースー眠っています。長野の人たちとの別れを惜しんでポロポロ涙した子も、笑顔で手を振っていた子も、みなそれぞれに素晴らしい思い出をもって家族の元に帰っていきました。

（記／山崎尚枝）

是非ご参加を

子どもの権利条約学習会

昨年の9月から、CYRでは子どもの権利条約学習会を月に1回開いています。ここでは1～3回までの内容を簡単に紹介しましょう。

第1回「人権って何だろう」講師：アムネスティ・インターナショナル日本支部粟野真造氏。

人権には、①自然的人権と②法的人権がある。前者は人が生まれながらにして持っている権利で、後者は法律で守られる人権。世界人権宣言は、第2次世界大戦への反省からつくられたものでその目的は大きく言うと次の3つになる。1．平和の基礎として人権を考える。2．人権の普遍的な価値を確認する。3．国際的に人権を保障する。

しかし、世界人権宣言は法的な規制力がない。そのため、この宣言を基礎に、細かい人権条約を規定している。子どもの権利条約もその1つになる。

ビデオの「世界人権宣言」を見て、どういう権利がすべての人に保障されなければいけないかを確認。

第2回「子どもの権利条約の内容を知る」。CYR10周年の集いでの吉峯啓晴氏の講演を復習（6ページ参照）した後、参加者全員で、子どもの権利にはどういうものがあるか子どもの権利条約第1部1条から41条までを読む。

第3回「子どもの権利条約国際理解セミナー」に参加。日本ユネスコ協会連盟の吉岡淳氏から、教育を受けられない子どもたちの実態。CCWA国際精神里親運動部の小林毅氏からは、フィリピンのスラムで暮らす子どもの生活。アムネスティ・インターナショナル日本支部の粟野真造氏からは南アフリカ、パレスチナの迫害・虐待される子どもたちの報告。当会の山崎尚枝は、カオイダンキャンプの子どもたちの様子や、カンボジアの子どもたちが描いた絵を通してわかる難民の子どもが望んでいることなどを話した。

第5回パレスチナの子ども

以上が第3回までの報告です。第4回から6回までは、「条約の背景にいる子どもたち」ということで、タイ、パレスチナ、フィリピンの子どもたちの置かれている状況を勉強しました。この学習会も残すところ2回。初めての方もどうぞご参加ください。次回は

3月9日（土）14:00 ～16:00「世界の子どもたちにとっての権利条約の意味」 大田 堯氏（東京大学名誉教授）会場：東京塗料会館（JR信濃町駅徒歩3分）参加費：500円。参加ご希望の方は事前に下記のCYR事務局までご連絡ください。

☎03-3353-9947

《事務局からのお知らせ》

幼い難民を考える会東京事務所の電話番号の局番が、1991年1月から4ケタになっていますのでご注意ください。新しい電話番号は

03―3353―9947

ファックスは

03―3353―9739 です。

「カンボジア」CYR・JVC・SVA 合同セミナーのお知らせ

現在、カンボジアを取り巻く世界の状況は大きく変化しています。しかし政変後、西側諸国からの援助が受けられず、わずかに得られた東側からの援助も、経済危機のため後退し、内戦の続くカンボジア国内では、食糧・医薬品等の物資や人材・設備の不足が深刻な状況です。将来、和平が実現しても、30万人もの国境避難民や、海外定住者の帰還などで混乱が予想されます。

このような状況下で、カンボジアの人々に対する人道援助はさらに重要になり、カンボジアに関わる民間団体、一般の人たち、在日カンボジア人などのネットワークづくりが必要だと考えます。その第1歩として、CYR（幼い難民を考える会）、JVC（日本国際ボランティアセンター）、SVA（曹洞宗ボランティア会）の3つの団体が合同で、カンボジアの勉強会を開くことになりました。1月から毎月1回行なっていますが、全6回の予定です。

第1回　1月19日（土）　「カンボジア難民とその背景」
講師　栗野　鳳氏、コン・ボン氏、チョン・ペンライ氏、熊岡路矢氏

第2回　2月23日（土）　「カンボジアの生活文化」――素顔の人々
講師　ペン・セタリン氏
（1、2回は終了しました）

第3回　3月30日（土）　「カンボジアの教育と福祉」
――子どもたちをとりまく環境
講師　山田ボパナ氏

第4回　4月27日（土）　「国際政治とカンボジア問題」
講師　未定

第5回　5月25日（土）　「国内復興の状況と今後の展開」
講師　熊岡路矢氏（JVCスタッフ、予定）

第6回　6月29日（土）　「シンポジウム　今後のカンボジアと市民協力」
シンポジスト　各団体から代表、その他

時　間　14：00　～　17：00

会　場　労政会館・第2会議室（JR、地下鉄東西線飯田橋駅西口より徒歩1分セントラルプラザ12階）

参加費　各回 500円

☆お問い合わせは、左記の幼い難民を考える会事務所までどうぞ。

僧侶が歩けば・・・・・ その2

——タイ、カンボジア行脚の旅

渋井　修

1990年5月11日

11時にカンボジア行きの飛行機が出るので、9時にホテルを出た。空港に着いて、手続きをして待合室にいたら、案内があって、飛行機の出発が1時になった。そのままそこでずうっと待って、4時になった。結局飛行機が飛んだのは5時である。何と空港に着いてから7時間も待たされたことになる。

空より眺めたメコンデルタは水平に広がり、メコン川が幾筋にも分かれて流れていた。しかし、ベトナム戦争の傷痕は随所でみられる。水田地帯に落とされた爆弾の跡が、上空からは溜池のように見える。この溜池が異常に多い。何せ、アメリカ軍がベトナム戦争で使った爆弾の量は、沖縄戦で使った量の60倍の120万トン。想像のつかない量である。飛行機は40分程でプノンペン空港に着陸した。僧侶姿であったからだろうか、書類を書いただけで、後はフリーパスであった。30分以上待ってようやく迎えの車が来た。空港からプノンペンの町までは15分ぐらい。町の表情は非常に明るい。何か浮足立っているようである。それもそのはず、この4月に、新しい国として出発したばかりなのである。車はプノンペン市内に入り、ある建物の前に止まった。降りた私には、いったいここがどこなのか、皆目見当がつかない。何かを尋ねようにもカンボジア語を知らない私にはどうしようもないのである。8時頃、一人のカンボジア人が部屋に入ってきて、英語でペラペラとしゃべった。私はフンフンとうなずいたが、わかったのは明朝また来るということだけだった。まあ、果報は寝て待て、で明日になればわかるでしょう。

5月12日

昨日英語で説明してくれた男の人が、2時頃来た。もう一人の男の人と一緒だった。この人タイ語がしゃべれるのである。この2日間、しゃべりたくてもしゃべれなかった私は、早速これからどこに行くのか、明日以降はどうするのか、今泊まっているのはどこか等々、知りたいことをすべて聞くことができた。私が泊まっている建物は、外務省の外国人用宿舎だったのだ。したがって、私は外務省アジア局のお客さんのような扱いなのである。

まず車で新しい塔に案内された。ここが虐殺現場の1つで、その塔の中には約8,000体の頭蓋骨が並べられていた。塔の周囲は骨を掘り起こした穴がボコボコといくつもあり、穴の中には、まだ胴体の部分の骨や衣服が埋もれたままで所々顔をのぞかせていた。新聞、雑誌で、虐殺現場の写真を見たことがあるが、実際に現場に来てみると、その“惨たらしさ”が手に取る

ようにわかり、痛ましい限りである。茫然として空を見上げているもの、しっかりした目で地面を見つめているもの。私にはこれらの頭蓋骨に、それぞれの表情があり、それぞれの目で、それぞれの考えで、何かを見つめているような気がしてならない。遠く過ぎ去った過去を惜しむかのように……。

点香して、経文を唱えた。

読経後、再び車に乗り、今度は拷問場へ行く。そこは以前は学校であったという。学生たちの笑い声が絶えない、賑やかな場所であったに違いない。しかし、かつて教室だった部屋に足を踏み入れると、生暖かい空気が充満していて、十数年もの間空気が澱み続けていたのではないかと思われるほど空気に重たさを感じた。空気に重たさを感じたのは、生まれて初めてだ。その空気、私たちが動いても道を開けるでもなく、そこの主のようにどっかりと腰を落ち着けて、まばたき一つせず、その空間を専有しているようであった。そんな拷問室がいくつもあり、拷問の道具なども並べられていた。しかし、拷問場にしては、やけに壁が白くきれいだ。凄惨を窺い知るような傷痕がないのである。ここで何千もの人々が拷問され、汗や、涙や、血を流

し、叫び声をあげ、恐怖の時間を何度となく繰り返した場所なのに、どうしてあの部屋の壁は何事もなかったかのように、きれいなままでいられるのだろう。案内人に聞いたが、塗り直してはいないそうだ。あの澱んだ空気のせいではないだろうか。もし扉を開け、天井をはずし、陽の光を入れ、新しい空気を循環させたならば、下に隠れていた血塗られた傷痕が姿を現すことだろう。何かそんな考えを頭に浮かべさせるような、異様な雰囲気だ。別の棟には虐殺される前に撮られた写真が壁の四方にビッシリと貼られていた。拷問の末にやがて訪れる確実な死をまるで楽しむかのように、一人一人ごていねいなほど細微に撮ってある。これは写真を武器にした一種のサディズムだ。そうとしか思えない。当然のように、死を目前にした者の顔は普段とは比べものにならぬ程の形相であり、口では言い表せないほどの姿である。おそらくこれを命令した奴は、毎日のようにこの写真を眺めては果てしない満足感に浸っていたに違いない。もうこれは、人間の世界を越えた餓鬼の世界である。日本の鎌倉時代、数々の地獄絵図、修羅場を描いた絵が世の中に出回った。その絵と、この拷問場が二重写しになって私の脳裏に焼きついてしまった。

車に乗ってから気がついた。私は拷問場で、1枚も写真を撮らなかったのだ。最後の部屋に頭蓋骨で作ったカンボジアの地図があった。どうしてあれも撮らなかったのだろうか……。私に写真を撮らせない何かがあったのだろうか。きっと単なるカメラマンとして、通過できなかったのだろう……。

《筆者プロフィール》

演劇、農業の経験を経て仏門に入る。87年7月タイに渡り得度。ベトナム戦争の頃、多感な青春時代を過ごした筆者は、非業の死を遂げた何百人もの人の霊を弔うため、インドシナに行くことを決心。

タイのバクナム寺院を拠点として、89年12月にカンボジアに向け行脚の旅に出発。これはその時の旅の記録です。

No26 1991.3.8

カオイダンの子どもたちがハガキになりました

カラー　3枚

白黒　2枚

5枚1組　500 円（送料72円）

お申込みは

幼い難民を考える会

東京都新宿区南元町6－2　☎03－3353－9947

ご寄付いただいた方々

1990年7月～91年1月（敬称略）

北海道　青野徳子　荒井敬子　小川ヨシ　小山田彰　片桐牧子　帰山ひとみ　砂田絹子　松浦芳子

青森県　佐藤美千代　白石富子　弘前学院聖愛高校

岩手県　浜田正美

宮城県　森合松美

福島県　高木芳久　高根秀成・健夫　平間喜枝子

茨城県　小山友の会　佐藤生子　関口博美　豊田一郎

栃木県　須永知子　三橋恵子

群馬県　市川久幸　林　京子　東別所B地区

埼玉県　新井美知子　一志悦子　石山民子　打越章子　お母はんの会　岡田和子　柏木三知子　島崎友四郎　菅　孝　冨田清江　名取知恵子　柳沢悦子

千葉県　川口昌宏　神庭信幸　国府台聖愛乳児園職員一同　佐々木秀子　篠田桂子　関根錦　土谷美知子　浜谷きみ子　服部三郎　花咲みさを　菱木邦子　三輪三枝子　モンテッソーリ江戸川台子どもの家　矢ケ部留美子　麗澤大学難民問題研究会

東京都　秋重知子　朝賀要子　朝倉敦子　天井静子　麻布教会　飯尾香織・美園　飯田照明　飯沼ふみ子　五十嵐タケ　五十嵐操子　石井恵美子　石井孝子　石川東世子　井ノ部百合子　伊吹佑子　宇都宮紗智子　大石敦子　大河内秀人　太田　和　大滝弘子　大水直美　岡崎光枝　岡崎路子　緒方貞子　小川浩一　奥村少枝子　小倉松枝　小沢篤子　尾平佳津江　香川澄子　笠原和子　交野政博　角谷論三郎　金森千世　かわず会　川野由美子　菊野正隆　北見アイ　木村久子　熊谷ことぢ　クラウスルーメル　久楽由雄　栗野鳳・美代子　小岩教会教会学校　幸田成人　小島礼子　小菅喜美子　小西恭子　小林直樹　小林治子　小宮正弘　小山康子　近藤典子　斉藤隆子・りか　佐久間羊子　佐藤和子　佐藤国作　芝野雅一　庄司きよ子　荘子正夫　嶋本操　鈴木重子　鈴木ヨシ　住田昌弘　聖アンナこどもの家　聖イリナモンテッソーリスクール　聖心会本部修道院　聖心会三光町修道院　聖心女子学院みこころ会　聖心女子専門学校　聖心女子大学グリークラブ　聖パウロ女子修道院　関口晴美　洗足婦人文化会　善福寺子供の家　高江州朝子　田尻陽子　田代泰子　田所正子　田中朗子　谷口隆子　谷口洋子　多野トシ　津賀都留子　粒良京子　東洋英和女学院東光会　時枝裕子　ドーフリンガ千鶴　戸田道子　長縄晴子　中西信子　永戸恭子　中村育民　中村克夫　西垣朝子　西木広志　苦瓜洋子　萩原恵美子　早水輝好　原　葉子　土生繁子　広戸　操　福島あや子　藤枝古屋寿子　不二聖心女子学院温情の会　藤森淑子　星田トヨ　堀　明彦・容子　堀　信子　堀内俊太郎　前田やよい　町谷トミ　松田邦子　松本尚子　宮垣満智子　向井幸江　麦の会・関矢英子　武藤徹一郎　武藤好子　村上芳子　村山みつ子　明泉寮　メリー永島　メリノールシスターズ　森　律子　モンテッソーリ御苑こどもの家　谷津孝一　山内典子　山岸早苗　山極小枝子　山崎朋子　山崎尚美　山崎紀子　湯原　淀橋第4小学校読書サークル　渡辺直子　渡辺典子　渡辺道子　和田知代　和田令子

神奈川県　井出貴江　伊藤恵子　今井野梨子　大坪進　鍵山真由美　カトリック鷺沼教会　カトリック横須賀三笠教会　鎌倉雪ノ下カトリック教会　菊岡貞子　菊池有子　北沢隆男　木ノ内和美　木ノ本みえ　木船重昭　グループ麻の葉　桑原啓吉　小石英夫　小久保卓二　越島陽子　小林国際クリニック　近藤セキ　志村悦子　高橋多恵子　高橋良夫　田島敏子　多田寿美子　たんぽぽ会　塚本迪子　堤　義治　都賀潔子　ともしび会　長田邦稲　聖坂学園オリブ工房　日野水節子　広戸重雄　広戸　操　更田晴子　藤井節子　丸山圭子　三浦ひろ子　森戸潔　モンテッソーリ美しが丘こどもの家　モンテッソーリ原宿こどもの家　八木本菊代　八重ゆかり　横浜雙葉小学校　横浜みこころ幼稚園　若竹芳子

山梨県　雨宮利雄　大東加代子　中村由美子

長野県　岩井　肇

新潟県　阿部　清

富山県　大沢まり

石川県　岩本玉陽　日下典子　葛葉むつみ

静岡県　伊豆海保育園職員一同　久留　孝　佐野克行　裾野聖母幼稚園母の会　土山武子　戸澤有為子　南荘　宏・敬子　丹羽洋子　湯山明美

愛知県　伊藤洋子　井上道雄　岡本啓子　楠本千穎　小峰祥子　関口ひろ子　土田友章

豊田婦人ボランティア　長谷川正一
三重県　宇井田愛子　廣方重俊
滋賀県　岩田美香　西谷靖男
京都府　荒賀房夫　伊崎佳明　新道雪子　田中唯男　谷口雅一・次郎　難民援助宮津カトリックの会　福田　菊
大阪府　秋田恭江　李　姫子　今村　眸　伊東峰明　尾崎道子　（株）日本エミック　上水口辰雄　カリタスジャパン大阪支部　菊地恵子　鬼頭璋子　木村育世　キリスト教保育専門学校　斉藤裕子　聖ヨゼフ宣教修道女会　立石三月子　永戸美紀　西島己美子　呑野佳子　二葉幼稚園　松尾博美　森　潤子　吉岡恵美子
兵庫県　浅沼健一　岡本豊子　岡本タイヤ　小川正子　小林聖心みこころ会　加藤喜代子　黒田佳治　神戸平安教会婦人会　小副川美樹　阪田一夫　塩津多恵子　西宮一麦教会　橋本啓子　春田有二　ヒュゲイアクラブ　宮澤朔子　宮前峰子
奈良県　今村洋子　高島曜子　大和郡山カトリック幼稚園
和歌山県　白水路子　藤木昌子
岡山県　岡山信愛教会　小川輝樹　三宅田鶴子
広島県　石田洋子　土井竜子　宮川喜代子　山中道子
山口県　藤井操　山口節哉
香川県　小西ひとみ　田村　保
愛媛県　坂本敬子　松山友の会
高知県　池田　透　池沢潤子
福岡県　案浦小百合　安藤玲子　大垣洋子　木上絹枝　古賀徳子　徳満裕子　蓮尾エリ福岡友の会幼児生活団　福岡雙葉学園高等科生徒会　松添　仁　みなと保育園
長崎県　大久保チマ
熊本県　青木　悟　岡本豊子　加瀬茂子
大分県　松山まり子
宮崎県　佐田恵子
鹿児島県　有村光代　岡部智子
沖縄県　大城美紗代　渡嘉敷環
海外在住　家元庸子　川上郁雄　木下由美

新聞募金

1990年4月～1991年1月

北海道　ロース幼稚園
宮城県　森合松美
埼玉県　打越章子
千葉県　篠田桂子　土谷美知子　花崎みさを　菱木邦子　吉岡俊吾
東京都　石井孝子　お告げのフランシスコ姉妹会　香川澄子　交野政博　川村栄子　栗野鳳・美代子　小林直樹　近藤典子　シスター鳴本　つくしの会　西木広志　西垣朝子　町谷トミ　松田邦子　宮副美紀子　柳井克子　山崎朋子　山崎尚美　和田知代
神奈川県　葦の会・遠矢清子　井出貴江　伊藤恵子　大熊裕之　木ノ内和美　小久保卓二　小島美子　志村悦子　田島敏子　丸山圭子
長野県　神津佳予子
愛知県　長谷川正一
滋賀県　岩田美香
大阪府　李　姫子　荻野芳子　（株）日本エニック　菊地恵子
兵庫県　加藤喜代子　塩津多恵子　シスター石戸
岡山県　小川輝樹
香川県　小西ひとみ
鹿児島県　有村光代
海外在住　家元庸子　川上郁雄

物品を寄せられた方々

1990年7月～1991年1月

北海道　小林悦子
岩手県　松本千寿子
宮城県　大友千鶴
福島県　鈴木知子
茨城県　河口久子
栃木県　角田真美
群馬県　後藤京子
埼玉県　岡田和子・知子　岡田由季　大河平香代子　金子節子　小林裕子　精華幼稚園母の会　高橋鎮子　田中裕子　能登　奚　米山英子
千葉県　内田　外　大津すず子　大野真理子　金澤ひさえ　久能基子　鷲見和佳子　友澤こずえ　中崎みどり　吉田文子
東京都　明石雅恵　朝倉敦子　朝賀要子　綾部徳子　有江　恵　飯田真理子　飯田光子　伊賀和子　五十嵐寿子　池田美波　石井恵美子　石毛丞子　石橋敏子　石原小枝子　泉本亜由　井出直広　伊藤京子　伊藤たか子　伊藤トシ　伊東止女子・伊藤みちい　伊藤美奈子　伊藤ゆか　伊藤美子　井上美恵子　伊吹佑子　一本成子　今井野梨子　岩田牧子　岩本磯子　上森智美　宇都宮紗智子　榎並瑛子　太田和　大橋きよ子　岡田あつ子　岡野勝子　岡部幸子　岡本巳伊子　小澤篤子　鬼崎

貞子　加賀玉樹　梶本美登里　勝木邦子　片山和恵　加藤定子　加藤武生　（株）アズノウアズ　（株）パワーテック　川崎恵美子　川崎留理子　河村なぎさ　木村久子　教区婦人会長・中村直子　日下英子　日下典子　国保征子　栗野美代子　見坊和雄　小出静子　小池ゆみ　攻玉社学園ＰＴＡ　小島新平　小林茂子　小林玲子　今野美世子　坂本　明　佐藤君子　佐藤幸子　柴野信枝　島川雅子　島田ミエ子　白石美千子　神保真理子　杉村ふさ　杉本正子　鈴木厚子　鈴木君代　鈴木千代　鈴木みどり　鈴木真理子　鈴木裕紀子　鈴木ヨシ　鈴木良子　鈴木順子　須原用次　聖心会本部修道院　聖心女子学院みこころ会　関口順子　洗足婦人文化会　総合プラニング（株）高石昌子　高崎一美　高橋巳美子　瀧川嘉子　武本令子　館野弘雄　田中朗子　田中悠紀子　田巻恭子　力石順子　粒良京子　出木場由里　東京ＹＭＣＡ専門学校　戸田道子　戸村由美　外山慶子　外山寛子　鳥栖良子　ドルフィンフォト　中川興子　中川真理　中島朋子　中嶋昌子　中村昊子　中村義昭　中村義子　中林昌子　西野直子　西村佳津子　西村圭子　野沢節子　服部智子　浜田麻理子　林　香代子　早水輝好　日比谷寿美子　廣瀬幸子　福田辰治　福田由美子　船木しのぶ　細田澄子　松井君子　松岡享子　松岡玲子　松本正子　松本楚子　宮代会　宮副美紀子　宮田三津恵　向井　武　村松道　明泉会　森本彰子　森本まさみ　矢上晶子　柳沼恵子　谷沢一江　矢島裕子　矢代明子　柳　功　柳沢和子　柳澤由美恵　山澤百合子　山路　圭　山田暢子　山田清子　山田妙子　山村あけみ　湯原　吉房祥　若松博子　渡辺郁子　渡部久子　和田令子

神奈川県　井出恵京　伊藤恵子　片山美恵子　木下和香子　小出恵以子　越島陽子　小島美子　篠田昌子　清水俊弘　清水ゆかり　白井憲二　関　和子　田口久美子　田中惇子　田辺ゆり　富岡孝子　内藤美代子　土生寿一　浜田秀子　林　未佳　東川悦子　福原和子　藤田玲子　松井君子　御子柴能子　森田綾子　田中純子　多田寿美子　八重ゆかり　ロンゴ幸

長野県　円幅友の会

新潟県　中林虎三

石川県　金沢友の会

岐阜県　久保田敦子

愛知県　伊藤はつ子

三重県　高橋須磨子

京都府　寺谷　崇　野々村容子　福田　菊　山本麻起子

大阪府　李　姫子　上水口辰雄　菊地直子　津田加津子　永戸美紀　西島巳美子　藤原節子

兵庫県　小副川美樹　藤川公子　湯瀬愛子

奈良県　高島曜子　藤木昌子

岡山県　平地智江　渡辺和子

広島県　田川泰資　中富都子　宮川喜代子

福岡県　蓮尾エリ

ご協力ありがとうございました。

訪問ボランティア募集中！

次の地域で訪問ボランティアをさがしています。近くにお住まいで、継続的に関われる方にお願いしたいと思います。ご希望の方は事務局までご連絡ください。

★東京・板橋区大山金井町（最寄り駅・東武東上線大山駅から徒歩13分）
日本語の勉強／30歳の女性（在日半年）
平日の昼間希望

講演会の要旨をまとめてくださる方

勉強会、講演会などのテープを聞いて、要旨をまとめてくださる方をさがしています。お手伝いいただける方、事務所までご連絡ください。

〒160 東京都新宿区南元町６－２
☎０３－３３５３－９９４７

幼い難民を考える会

CYRきのう・今日

タイ・カオイダン

1990年10月

子どものハシカが流行。MCH（母子保健）が大規模に予防接種をしたのにCYRも協力し、洋裁教室の建物を2日間開放。

レッドバーナ（社会福祉を担当するノルウェーの団体）から家庭に問題があって職探しに苦労している女性2人をあずかり織物教室で糸巻の仕事にあたってもらう。

10月3日、26日

タイの被災村、パライとノンヤプロを訪問。3か月続けた観察期間が終わった。11月から、2つの村の保育者を対象にトレーニングを始める。

11月

HI（障害者のリハビリを行なっているフランスの団体）に洋裁教室の作品60点を寄付。

11月28日

国境の避難地サイトKから4人が織物教室に絹かすりの見学に来る。

12月10日

人権の日。UNHCRはバンコクから講師を招き、人権についての講演会を行なった。IRC（教育を担当するアメリカの団体）は展示会を開いた。

国内

90年10月9日

東京の調布公民館にて元海外スタッフ関口晴美の活動報告会。

10月12日、11月29日、91年1月24日

ボランティア懇談会（於：大和定住促進センター）。神奈川県を中心とした定住者にかかわる団体とセンターで情報と意見交換を行なう定例会議。

10月28日

第21回バザー。（於：聖心インターナショナルスクール駐車場）1か月弱の品物受付期間と事務所移転後初めてのバザーだったが 1,637,359円の収益が上がってひと安心。

11月17日、91年1月26日

訪問ボランティア打合せ。2か月に1回、活動で得たこと、考えたこと等を情報交換している。1月には日本語教育へのアドバイスも行なっている。

11月17日、91年1月5日

アドバイスグループ打合せ。NHKパネル展の受付分担等。

11月27日

児童家庭福祉国際協力研究会に事務局峯村出席、活動報告を行う。（於：全社協）

12月6日

NHKラジオ第1「ほっとたいむ 131 —— お母さんたちの国際交流」に事務局峯村出演。

12月23日

埼玉県川口市の柳崎団地にてクリスマス会。カンボジア人、日本人合わせて約 100人が参加。

毎日国際交流賞受賞！

昨年、CYRは第2回「毎日国際交流賞」を受賞しました。この賞は、国際協力・国際交流を促進し、市民の国際理解を深めるために、毎日新聞社が89年から設けたものです。保育に着眼し、同時に父母のために技術訓練を行ない、また国内でも活動を行ない、内外一体となっての支援が評価されたものです。賞金として 200万円を受けました。（写真提供／毎日新聞社）

1991年1月5日

理事会。カンボジアの活動について。

1月19日

カンボジア合同セミナー。JVC、曹洞宗ボランティア会との初の合同勉強会。（於：東京新宿の千日谷会堂）

1月24日

東京ボランティアセンターシンポジウム「国際化とボランティア活動」に事務局峯村出席。なぜCYRは幼い難民に焦点を当て活動しているかを話す。

《編集後記》

とうとう湾岸戦争は地上戦に突入してしまいました。1月からずっと、落ちつかない日々を過ごし、会報の編集作業も遅々として進まず、会員のみなさまにまたしてもご迷惑をおかけしました。今年こそ、会報を「ニュース」に、と思っています。（じゅん）